



正規取扱通販サイト



HiizLY

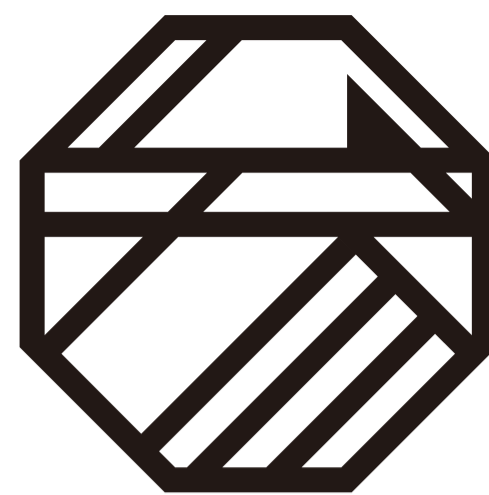
日本の良きモノを、
ワザを、
ココロを。

オンラインストア



www.hiizly.com

今なら全国送料無料でお届けします！



SANGOU™

The Magazine of Fashion & Japanese Culture



JAPANESE
ROUGH
KIMONO
STYLE

MASTER CRAFTSMAN

紺屋古庄 / 六代目 古庄紀治

「現代の名工」の手による、 自然界の材料のみの 藍液で染める、 「天然灰汁発酵建」。

「冠衣」の藍染めが欲しいと、友達からのリクエストがあった。菊田参考としても藍染めは以前より興味があったので、早速調べ始める。色々な藍染め屋さんが出てきたのだが、特に目を引いたのは、徳島県の「古庄染工場」。「徳島市無形文化財指定」「国選定卓越技能章（現代の名工）」を受賞されている紺屋古庄六代目の古庄紀治氏の藍染め工場だ。その肩書きもさることながら、その人物の魅力に惹かれた。ネット検索で出てきた情報だけなのだが、それだけでも十分に伝わるその魅力に惹きつけられ「この人に染めてもらいたい」と強く思った。

古庄染工場にはホームページもメールアドレスもない。公開されているのは電話番号だけ。調べた翌日にはアポを取るために電話をかけてみる。突然の申し入れにも暖かくご対応いただき、徳島へ訪問する日時が決まる。初見の電話ながらSANGOUのコンセプトなどを説明すると「ガハハ」と笑ってお話してくださ

るその雰囲気惚れた。より一層徳島への期待が高まっていた。徳島駅に着くと、徒歩30分ほどの距離に古庄染工場があった。その看板が歴史の深さを物語っている。毎回工場を訪問するときはワクワクする気持ちと同時に非常に緊張する。それは、看板から発せられるエネルギーに当てられてしまっているのかもしれない。待ち合わせの時間になり玄関を開けるとそこはもうすでに工場であった。モノづくりの現場が玄関から始まっている。なんともかっこいいその雰囲気に心を打たれる。

奥に通していただき、いよいよ古庄紀治氏と対面。職人としての強い佇まいながら、温かな表情で迎えていただいた。まず驚いたのは、その「手」だ。そこには「藍染職人の手」があった。まだ作業を開始していないにも関わらず、その手は肘のあたりまで「藍」に染まっていたのだ。長年この道を歩んできた「手」。その道を極めんとする「手」。その手の持つ表情に大変感動した。



Henley 藍染冠衣

「古庄藍染加工」
伊勢木綿 - 製品染め -
Size / S M L XL ¥25,000 (+tax)

藍染めは水が命だという。水に塩分が混じってくると染まらなくなってしまうのだ。古庄染工場でも水源が悪くなってしまい、長い歴史の中で2度ほど工場の場所を変えているとのことだ。

天然の藍染製品は、肌荒れを防ぎ、毒蛇や毒虫を寄せ付けないと言われてる。古くは、武士が戦場で野宿をする時などに効果を発揮し、燃えにくいため火消しの纏いや蒸気機関車の機関士の衣服として普及していたそうだ。古庄染工場では徳島県の染(すくも)を使用し、自然界の材料のみで藍液を作る「天然灰汁発酵建」によって、日本でも数少ない本物の本藍染めを行なっている。自分の手を藍釜に入れて生地を触って、水で洗って、釜の中での生地の状態を知る為にも手で触る。生地同士が触れているだけでも、均等に綺麗に染まらなくなってしまう。非常に繊細で気を使う作業を繰り返すのだ。日本の誇る天然の本藍染めはそうやって完成する。職人古庄紀治氏がその「手」で染めた藍染めの冠衣。ぜひその身に纏って頂きたい。



▲古庄染工場の玄関。歴史を感じる看板。



▲六代目古庄紀治氏の手。職人の手。



▲六代目古庄紀治氏との一枚。



TRADITIONAL CRAFTSMAN

株式会社はらっぱ / 原山修一



120年の歴史を 途絶えさせない。 一度は封鎖された 工場を引き継ぐ男。



単羽織 古代縞

会津木綿

Size / Free ¥58,000 (+tax)



書生シャツ

会津木綿

Size / S M L ¥33,000 (+tax)

菊田参号は東北は宮城県仙台市出身だ。SANGOUを立ち上げ、伝統工芸と携わっていく中で、地元東北の伝統工芸にも携わりたいと考えていた。

調べていく中で福島県は会津若松の「会津もめん」なるものがあることがわかった。織元を一軒見つけたので、いつも通り電話やメール手紙を出したりしてみたのだが、一向に返信がこない。電話も繋がらないので、困り果ててしまう。しかし諦めてなるものか!東北の生地を使いたいのだという想いで、とにかく現地に行ってみることにした。

会津若松に入り、その住所まで行ってみたのだがあいにくの休み。これはもう諦めるしかないか、と途方に暮れて「こうなったら会津若松観光でもするか」と街を散策していたところ「もめん糸」という気になる名前のお店を発見!

入店すると店内には「会津もめん」が山ほど置いてあるでは



▲もめん糸のお母さん。

ないか!これは、と思ひあれこれと店主のお母さんに尋ねる。すると会津もめんの織元は二軒あるということだった。菊田参号が連絡していた方は、忙しくやっている為、なかなか連絡がつきづらいということだった。そしてもう一つに織元の情報を教えていただいた。それが今回SANGOUで使わせていただいている「株式会社はらっぱ」の会津もめんなのだ。人の出会いと繋がりでたどり着いた会津もめん。今回のことでやはり人の繋がりは非常に大事だと改めて思ひ知らされた。

もめん糸のお母さんに繋いで頂き、後日に改めて会津に赴いた。株式会社はらっぱの原山氏と対面。SANGOUについてのコメントや想いをお話させていただく。原山氏は非常に熱い男であり、その熱が心地よい人物出会った。

それが行動にも現れている。「株式会社はらっぱ」は前身である「株式会社原山織物工場」を引き継いだ名前なのだ。前社長の突然の死により一度は封鎖してしまった原山織物工場。それを途絶えさせてはいけないと、引き継ぐ形で株式会社はらっぱは始まったそうだ。

その際に原山氏は長いこと勤めていた東京での勤め先を辞める決意をし、地元に戻り原山織物工場の「会津もめん」を復活させる為に尽力している、という熱い男なのだ。菊田参号はその想いを打たれた。

元々、原山織物工場では糸染めから織りまで一貫生産ができ



▲会津もめんののれん。



▲歴史を感じる羽織。

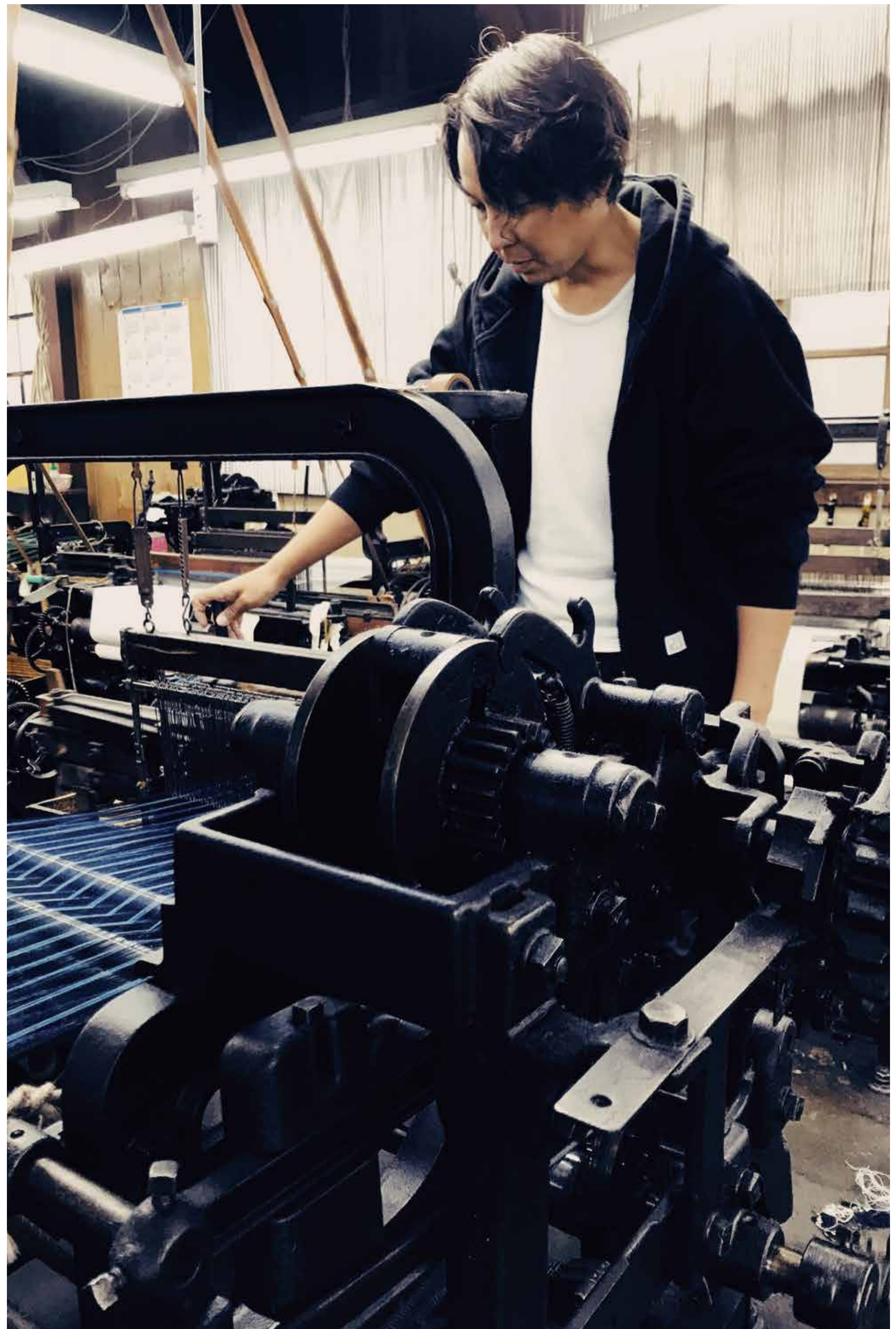
ていたそうなのだが、染色は前社長が一人で行っていた為に、現在では染め工場は封鎖されたまま。織物工場は稼働できるようになったのだが「本当の復活とは染め工場を復活させること」と、原山氏は語る。まだまだ道のりは長い、いつの日か染めから織りまで一貫生産された会津もめんSANGOUの製品が作れる日が来ることを願ってやまない。

会津もめんは、冠衣の伊勢木綿同様に使うほどに柔らかく、育てがいのある生地だ。木綿平織の堅牢な織物で、古くから野良着などとして広く着用されていた。厚みがありふっくらとした質感で、家庭での洗濯にも耐えるほど丈夫である。生地によく空気を含むため、汗をよく吸い込み保温性に優れている。

かつては、「新品は野暮だ」といわれるような美意識もあつた日本。ちよつとこなれて「それ、何年目?」と言ひあつて、生地に育てていくという楽しみを感じてみるのはいかがだろうか?

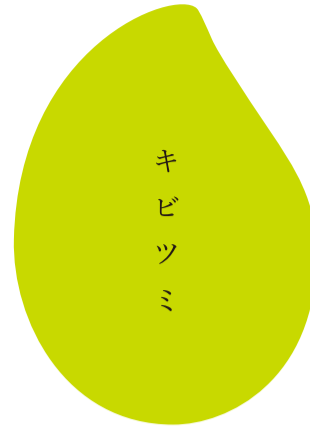


▲原山氏との一枚。



AGRICULTURAL BRAND

キビツミ / 小石哲也



農業 × アパレル。 田舎へ着て行くべき、 リラックス感の ある服の提案。

小石氏との出会いは、氏の前職であるレザーブランド「ISAMU KATAYAMA BACKLASH」に勤めておられる時だった。とある店舗の立ち上げに関わる機会があったのだがその際に、アパレル業のど素人出会った菊田参号にたくさんのお話を教えていただいた人物。その店舗の取扱ブランドにその「ISAMU KATAYAMA BACKLASH」があり、その担当として小石さんに面倒を見ていただいていた、というのが始まり。残念ながら力及ばず、その店舗はうまくいかなかったのだが、それ以降も大変よくしていただいている。

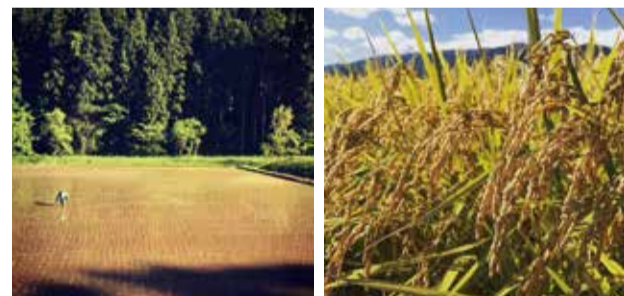
「ISAMU KATAYAMA BACKLASH」に出会って菊田参号の人生は大きく変わった。それまではグラフィックデザイナーとしてモノづくりに携わっていたが、そこに意味を感じられなくなってしまったのだ。BACKLASHのモノづくりや考え方、スタイルやこだわりに触れるにつれ、自分のやっていることが「本当にこんなことをしていいのかな、これは本当にやりたいことなのだろうか」と大きな疑問を抱くようになった。そんなある日、以前の記事にも書いているが「革ジャンのように着るほどに味がでるようなTシャツを作りたい!」ということを感じ立ち、SANGOUはスタートするのだ。冠衣を作る際には、小石氏にも相談させていた。

そんな小石氏がBACKLASHを辞めて、自分でブランドを立ち上げるといった話を聞いた時には大変に驚いた。「辞める」ということでもちろん驚いたのだが、一番驚いたのはその内容。どんなブランドを立ち上げるのかと聞くところから「農業 × アパレル」をコンセプトにしたブランドだということなのかな、最初はピンとこなかったが、小石氏の言葉を聞くにつれその想いの熱さもさることながら、一番感じたのは「あったかい優しさ」であった。

自身も地元である長野県に住まい米農家をやりながら、18年という長きに渡るアパレル業界での経験を生かし、「農業 × ア

パレル」というコンセプトを成立させるということなのだ。そこには地元の産業を盛り上げたいという思いや、「誰かのために」という強い決意を感じた。

小石氏のブランドは、その名を「キビツミ」という。キビとは「機微：表面では知ることのできない微妙なおもむきや事情」であり、ツミとは「(人為的に)摘み取る、積み上げる、罪と認める」ということを合わせた名前とのこと。「動植物の「KIBI」を感じ、意思を持って「TSUMI」を行う。」というなんとも美しい名前からは、先述の通り氏の「優しさ」がにじみ出ているように感じる。



「田舎へ着て行くべき、リラックス感のある服で、オールシーズン着られる服がキビツミの服。」

キビツミのラインナップには、アパレルだけでなく、氏が丹精を込めて作った「お米」もある。新米を食べさせていただいたのだが、しっかりとした歯応えのある非常に美味しいお米だった。お米を焙煎して作ったコーヒーというのも非常に美味しかった。

そんなキビツミの立ち上げのタイミングでSANGOUに声をかけていただいたこと、コラボが実現したことは非常に感謝している。単純にキビツミのコンセプトとSANGOUのコンセプトに「親和性がある」と感じていただけなのが、一番の喜びである。自分のやっているモノづくりは間違っていないのだな、と実感できた瞬間であった。

今回のコラボでは、SANGOUの冠衣をキビツミが「米炭染め」



KIBITSUMI × SANGOU
Henley 冠衣
「米炭染加工」
伊勢木綿 - 製品染め -
Size / S M L XL ¥27,000 (+tax)

をしている。SANGOUでは初となる「炭染め」。深黒とも藍ともまた違う表情。その仕上がりはまさにチャコールグレー。まさに炭の色出会った。淡く繊細で美しい炭染めの冠衣。冠衣に新たな表情が誕生した。

襟下には「キビツミ」のネームが、袖口にはキビツミロゴマークであるお米ロゴのビスネームが入っていることで、その雰囲気により素敵なものにしている。

「伊勢木綿」で作った「冠衣」が「炭染め」に出会った。なんとも日本らしい、職人の手が幾重にも折り重なっている一着。ぜひ「動植物の「KIBI」を感じ、意思を持って「TSUMI」を行う。」ということを感じてほしい。



▲左から小石氏(キビツミ)、白井氏(伊勢木綿)、菊田参号。

